

インフラストラクチャーをめぐる人類学的研究の動向

著者	古川 不可知
雑誌名	民博通信
巻	164
ページ	25-25
発行年	2019-03-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009410

インフラストラクチャーをめぐる 人類学的研究の動向

2010年代における英語圏の人類学ではインフラストラクチャー(以下、インフラ)をめぐる研究が活況を呈している。これまでに多数の論考が発表されているほか、後述のとおり研究の手引書なども編まれている。この潮流のなかでは、道路や水道網のような概念的な意味でのインフラにとどまらず、さまざまな社会において日々の実践を下支える構造を広くインフラと捉えながら分析がおこなわれてきた。

インフラストラクチャー研究

インフラをテーマとする人類学的研究は、90年代にSTS(科学技術社会論)やANT(アクター・ネットワーク理論)の影響のもとに登場した。インフラ研究の関心のひとつは、さまざまな実践を可能とする不可視の基盤が、モノや概念および人々の実践そのものと結びつきながら成立する過程を明らかにすることにある。蛇口から出る水で顔を洗い、時刻通り運行する電車に乗って通勤し、PCを開いてメールをやり取りするといった日常をそれと意識することなく送ることができるのは、考えてみれば不思議なことであろう。

インフラ研究の立役者となったスターとルーレダーは、遺伝学者の研究拠点間を接続して協働的な知識生成を下支える情報システムの構築過程を分析し、インフラの持つ特質を整理した(Star and Ruhleder 1996)。ここで重要な点は、インフラとは関係的なものであり、個々の文脈に応じて何がインフラを構成するかは個々の文脈に応じて変わりうるということだ。たとえば水道は住民にとってのインフラである一方、配管工にとってインフラではない。あるいは、送電網はコンピュータにとって不可欠のインフラとなると同時に、送電網にとってもコンピュータは不可欠のインフラである。そして

インフラは、順調に機能しているあいだは人々の意識にのぼることなくその実践を支える一方で、不具合をおこすとその物質性を顕わにして人々や社会に予期せぬ影響を及ぼす。このような観点から、水道や電気をはじめ、川や森などの「自然」的な基盤、あるいは通信プロトコルといった記号の体系まで、生活世界を支える多様な構造がインフラ

として捉えられ、どのように人々や社会と相互作用するのかが分析されてきた。

また人類学におけるインフラ研究をレビューしたラーキン(Larkin 2013)によれば、不可視となって機能するインフラの対極には、たとえば車の通らぬアルバニアのハイウェイや国家の威信を賭けたインドネシアの人工衛星プロジェクトなど、壮大なスペクタクルそのものを誇示するインフラがある。インフラは不可視性と可視性のスペクトルのあいだを行き交い、平凡な日常を可能にするとともに未来への欲望をかきたてるのである。

だがインフラが日々の実践を支えるあらゆる構造を指しうるとすれば、何をどこまでインフラとみなすべきだろうか。インフラに関わる論点を広範に取り上げた研究の手引きを刊行したハーヴェイら(Harvey, Jensen, and Morita eds. 2016)は、厳密な定義を与えにくく、むしろ多様な対象がインフラとして論じられうることにこそ、この研究のエキサイティングさがあるという。従来はまったく別のものと思われていた構造物や事象をインフラと捉えることで、それらのあいだに比較可能性を開いてゆくのであり、インフラ概念はまさに人類学的思考にとってひとつのイ



高山都市ダージリンとその生活を支えてきた山岳鉄道(2015年7月17日、インド)。

ンフラを構成しているのである。

とはいえ、さまざまな対象をインフラと捉えて知見を生み出す議論はこれまでに一通り出尽くした感もある。インフラ研究の今後は、いかにその概念の有効性を保持したまま議論を深めてゆくかがポイントとなるだろう。私見では、切り口のひとつはインフラに対応する現地概念の精査にある。これまでインフラは近代や国家社会と結びつけて論じられることが多く、インフラの語はある種の普遍的な概念として、世界各地の多様な事象に対して一律に適用される傾向があった。だが非西洋社会においても、人やモノを下支える構造の観念はさまざまな形で存在してきた。そうした現地の概念を通してインフラ概念そのものを再考し続けることは、自明の基盤を問い直すことからその豊かな知見を生み出してきたインフラ研究にとって、あるべきひとつの姿であろう。

【参考文献】

- Harvey, P., C. B. Jensen, and A. Morita (eds.) 2016 *Infrastructures and Social Complexity*. London: Routledge.
- Larkin, B. 2013 The Politics and Poetics of Infrastructure. *Annual Review of Anthropology* 42: 327-343.
- Star, S. L. and K. Ruhleder 1996 Steps Toward an Ecology of Infrastructure: Design and Access for Large Information Spaces. *Information Systems Research* 7(1): 111-134.



山道を往来する人とモノ(2013年9月29日、ネパール)。



カトマンズの車道(2013年7月22日、ネパール)。

文・写真 古川不可知

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員。専門は文化人類学、ヒマラヤ地域研究。論文に「インフラストラクチャーとしての山道」『文化人類学』83(3): 423-440(2018年)、訳書に『ソウル・ハンターズ—シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』(共訳 亜紀書房 2018年)などがある。